



范公羽南合集評註
上



依 借 の つ け 句 を そ の ぐ む と 思 ふ
ま の ち 若 々 意 心 胸 の つ け 句 を よ む
な げ 一 若 々 意 心 胸 の つ け 句 を よ む
ま の ち 若 々 意 心 胸 の つ け 句 を よ む
ま の ち 若 々 意 心 胸 の つ け 句 を よ む
ま の ち 若 々 意 心 胸 の つ け 句 を よ む
ま の ち 若 々 意 心 胸 の つ け 句 を よ む
ま の ち 若 々 意 心 胸 の つ け 句 を よ む
ま の ち 若 々 意 心 胸 の つ け 句 を よ む
ま の ち 若 々 意 心 胸 の つ け 句 を よ む

おぼがつぬよその附合集をろばふ
ちぢあさきぞつひよ志の評注茂か
たふめりまのこもた翁を志るもつふ
べしかりが依譜よ若くは古とは
まさをひらきまゝにべしつが辭
茂まゝにべしつらひかかりとらふ水
玉を因づくまゝにち用を専らし

きらの
ほん

芭蕉公の附合集

評注上卷

木鳥文庫

雲英

紙の記

二十五条曰紙ハ発句の余情と氣色の
面ふくなるやうにきだし紙のまがら
持てるハ紙のうらゝは何らぞ

酒債尋常往不在

人生七十古來稀

詩何きむどまをむさなる酒債ハ

冬 湖日く水く馬よノスル加馬コバ紙

発句詩商人といひ酒債といひ詩人酒

附合
上

徒の何りきぬをのぞくもたさけくも
漱と音ましく用ひるよのさるる程と漢
句のきざつたりてむせ句の余情を
何らハ一たりけれどとしかみたり粟の
依借とて又一神あり公卿いさぶと正凡
のま面目をけら小ざる時のさといふれ
バ常格とまづ〜

霜月や鶴のつづくならびて

冬の終日乃何りれありりて
けねハとふ人のかごとまる名言き

秀逸あり冬のりき二句の間ふらるが
如し升とが冬の白位解ふふの從く
水を解きる時を却て升二条も
体とつらるるよき注とつらるる大に
ものぬとつらるるいづれも解た
いひたらるるものよあらだ口を出さだか
あたらびたがふものあり公卿もこの
の乃依借ふつらるるはめて正凡
のま面的をけられらるるよまのまは
ね何りきざつたりてむせ句の余情を

あしるバ巻中まゝ古流の修身此流
まゝなるよりありては猶も意よ此を甚
何らきものこはてその流鶴のつくく
あらびぬくと句づらり此酒流なるふ
韻字イムジふても留む何れ水ありりやとい
ひはしたるこ水は流の原流とい
ふるもく流才三ふまはりその三流
何らゆりが師軍更平きけるる有
る水発句ハ天よりてかちちたもの
あま流ハ地よりてのまゝるるをとり

いどり才三ハ人よりて動くことをつる
どる流ハのまゝるるをとりいづりて流
づるるをむねとまゝるものなるバ志い
と動くは韻字をもてあるよりと本
式とて本式ハまゝるるハちまは流るり動く
まどきもの、動くハ異式なるバは流
のめくありりや或ハありりるもの
もとも動くかなもてあるハその流く
又ハ流を風吹のたぐひ韻字し假
名とも定まらざるハ行流あり才三ハ

紙とハヤ〜かりり〜部く〜るをつらちとる
おふ部くが本式ちり中〜もておて
らむたなどをまら用ゆる〜りハけかまも
とも部くがおちりまれ才三のまの辨
たり外の假名ハ行辨讀字をぬるど
ハるの辨ちりけまら草天地人の
ことり王をまらざれば紙才三よクし
られど極式とつふものハか〜るをくか
ハるだくらざるものよてかりバ白づり
か〜ぬよちりか〜らざればみどりこ

世ふ宗通ちりいひ〜依階をアキナ者
何よつけの因ふつけ侍よ秘侍といふり
をつらり〜人をモラ探び〜侍ふるりハ
人成けりりてアキ價をむさばらむとての
まりざちりま〜ハ依階ふ侍よ秘侍
とつ〜りハちりま〜のこ〜ハ何づ〜らぬ
り〜ちり〜ちり〜けまら草の〜を
一た〜りの秘侍のや〜よ〜者何ま〜を
こがま〜ちりいひつ

檜竹立雪を人下のやどり外

稿一つりぬ 口とつてそゆく

飛鳥旋まふ雪をいのちとまざる風狂
の旅人ふうち厚く稿よとつてそゆく
ふとやう乃けしきをつけたるるりこ水
行跡の紙あり

時ハ秋を理をこめ 旅のつと

厚をとまぬふやう 風の月

吾れ句ハ送ふの句あり時ハ秋として秋
のあり水よたもろき時ふハふ大和歌
此ゆーきん何まさ一を理をうけての

旅ふ水バまひめく 何れ水なるの ながめの
つとも何らむなつ しくらやまのく
ころ付れとつよろをまけく 内水にぞ
わが身生渥旅より 旅ふはまらへ旅了
とも森まざる 風や流水のよるべき
身を何れ水めすく けふ何いさらの紙
なまてを旅よのむしり 詩奇とも
ふたふー

江戸橋くろかよいむぐ志ん水

岸 橋の両相平か一りるる月

公初ハか一つ〜江をさるるあつとよふ
しほごの人なきバ時あ〜の庭くふ
江戸をバ思ひ出ぬふらむといへるころ
を時あふ揚々志をりくる伝之伝も
ろの阿いさつをうけ〜い〜も産産の
をぬふかつり〜とありこれも古個
たあきバけ〜うふハ解〜が〜
まろくぬふ恰をめをぬぬの産
一 相わろろ〜ふるひ〜むれ
きこえ〜るま〜くわ〜く解ま〜ふ

及びぬ

時あ〜ふ溢^{カキ}かりをむるの産
火 産のはあふ 産をつぐ人
桑白具ハ産をま〜く出りぬ〜も
門の溢をバリをふか〜産ぬ〜時由降
産〜ふハ具ガ産にゆ〜産産
をたの〜あむ〜産人産〜産
ふ産さぬ〜よりぬ〜あゆ〜も産
火 産には産をた〜時あをたの
みぬ〜といぬ〜るた〜り産もた

花蕉とあつふ風の破笠

花白ほいさつましく雨降西行よてまあやば
あふ宿すおらとむむと向うけるよみや西
行のめきさるさき執りおよてハな
花蕉とやしくはふ破水安きさたり
なげぬる昔よてこころはいとささるこ
る旅ちりり花蕉とふ風の破笠さとい
へるひびきゆふやちりー花白も公卿
の常は西行さくらやあふこのをさか
ての化ちり

花の咲かたながら草の空おろふ
秋千ーはるく 篠のくづをれ

花白ハあつさくをあつさる化之公卿の
材が像儼なる成見く何れ水は人を
し〜世小用ひーのばみ人のかいらふ立
て園のハコトもあづららむむをき人
おなるをさるおの中ふからぬくそ
水け流ふ老ぬふハちちをーからぎや
さ水どろの人よとり〜ハさるく何れが
たさちんよこころとたぐひなくミヤリ花蕉

したるあつろをかぐやけく句つらめて字
のな細小花の咲くを秋すしるあつ
うひなまねねハワガガ城人のちうみる
にねとろきてこ爪うく 和入く。あ洞
秋ふ志ふるく蝶のみる。氣もなきく
づをゆるる系乃ましくとろいへと辞徳
謙近のことバなり他者の句をつくる
十七字十四字の間ふおぎりあはたそ
ろ何りく口上をのづるがめー後ふな
ふうくあつろをとど知よ

師の標むの 拾ハむ木のまか

さくたふおおの ヒダ 口十一

みれ白紙ともふ古洞あふバきとえがに

解しゆたりとも 無き無のりく

霜の宿乃詠藤又飯屋をまて

古人がやう乃おの本うら

みれ白けききさお乃者ふ息をちもの

もたのくく時あうらぬ飯屋をまをまお

らをもむいふのめぼのりつふせくおが

さむとあさりたるくまきこふ飯屋

何や—まればもうづねもろくはた—たれが
旅のうけをもちまぐさむ。ちかやれ、不
免さるるろとやの花乃雪とハのめれ
どおのそるといふゆいまでけぎ依借
よてかくつらり水かや何ゆれかまれ吉
酒の存臭もくくようらぬことバるりまへ
く公の句ちあれがとてコトあやしくぬちありと
おぼえさるハをううちあり吉酒ハハうら
ぬ句もたなくころ
めぐり—や旅葉の中乃公羽中

齋ジの甘藷カンショとくちをるる冬梅

飛白と旅葉の中乃公羽をこつける
風情何となく向上あるふ冬梅寂落土
の甘藷ゆきをさるるおぼのゆふを何ハさ
たる旅なま

旅のそををみる目

飛白と旅葉の中乃公羽をこつける
風情何となく向上あるふ冬梅寂落土
の甘藷ゆきをさるるおぼのゆふを何ハさ
たる旅なま

中をふらふはまぐくの旅つらんぬふらむ
 がるれぬぞ神もほころびぬ旅ふやうき
 ぬふりもも見えぬちを志ふころといひ
 ちゆくはめたるあろそ旅はをれをけく
 いやく左様もごころだ旅森のまゝはたき
 小やう水てまよハ眼をきらきらぬどの
 何くはよおぶさよとここへたも
 精^{ヤキ}飯や伊る古の雪山^{クガキ}まき
 砂きりりりーりがそ乃^ル旅
 朶白けまきおろりの旅ハ精飯も伊

うら古の雪山^{クガキ}まきむきらめく^ル精飯
 めにむいぬりりまきまのうら又ハをきり
 くもまうらむと傳人の旅をけりりる
 あろをけりりも^ルおんまのぬく砂
 をあててまきりハまきりりりりりりり
 る旅なりまきらぬく朶白飯八人と回春
 ささるがぬく或ハ向ゆりり或ハ向ゆりり
 旅ト或ハ人の祠をかつていやくはま
 何らぬといふ旅ハ五辨八辨の役何れ
 ど朶白ハもと^ル澄おろして何れをりり

脛合
 上

十一

おらうお林ハヤシよさそ〜のよ仕事

田植ウヅエ〜もに 終乃 終起

吾昔白公ハクキウを田家ウヂノカよ〜あ〜るち〜の〜

〜ろ〜ぬヌたぐその地チふフをヲけケり

るルぐぬヌもまマづヅ〜よヨゆユババからカラびビずズや

酒サケ志シのノあアらラゆユはハはハのノ月ツキ

はハ酒サケもモたタだダまマハハ何ナニらラ〜度タビぐグぬヌのノから

びビたタるルをヲきキ〜つツけケたタるル李ライ社シャがガおオなナにニ林リン

夜ヨ蘭ランなるルもモぞゾ酒サケ志シのノ〜るル形カタらラむム終シマ

のノ〜けケ〜かカくクたタるルやヤ〜たタるル〜

志シのノ感カン〜そソみミをヲやヤみミ流リウのノ田植ウヅエ唄ウタ

必カナラ之ノ何ナニらラたタ免マフむムふフ終シマのノ流リウ〜

吾昔白公ハクキウハ終人シマノヒトよヨあアあアゆユ〜もモ流リウのノ田植ウヅエ唄ウタ

たタ〜きキ〜らラをヲむム〜終シマハハ流リウをヲ〜ゆるル〜

後ノチ成ナリ何ナニらラたタむム〜のノあアらラぬヌあア〜

りリぐグぬヌきキ終シマがガりリ終シマのノ何ナニらラ〜むム〜

終シマもモたタらラぬヌババあア終シマのノ流リウをヲ〜るル〜

〜はハ志シのノあアらラたタ免マフむム〜のノあア〜

たタ〜らラ〜ぬヌよヨ〜とトかカけケ〜りリはハ終シマをヲ世セ

みミ終シマ流リウ〜のノあアらラぬヌ〜のノあアらラぬヌ〜

田舎はけしきづいづい背けるも
 見えばやあまが子をちぎる影の如
 るの葉をささふたむゆめづい
 こゝも物不附くたのしみはゆめづい
 下まごみほろごらめあまの
 つつる田舎の何れも海見さぐめ
 時ぬくや花まで流る 旅のま
 宿ちた 餘をとむおろそ
 五世白ふこやうまきさゆ花の流る旅の
 を見くくまきまのあつてさびらまぐれに

何ひちやむぐれまで流りくく花よきて
 東ぬふといふころなたらばまぐれ
 やあれど又いまが水ぐれやともきこゆ
 ろくいなく時ぬふ何れも旅のま
 植しても何れもんまきよ花の流る
 ねおろくく影しげたのまにまぐれ
 のまをいたまにげりやまのま
 らむがたぐれぐれやのかくねぐ
 だきぬハ赤子を轆よたとへくか
 餘のよるべなき者たよめの子
 君いり

草のめさく人をめく比喩しく何いさく
たるをうり

奥底もあきて冬木の梢ふ

小春ふ首のうごくミナト虫

おれも何いきつミナトの登向ゆくケム君と赤ハ奥
底もあきて冬木の梢乃めくさくごく
まごくも見えきくやうにケムえあといつるん
をくけて何のわが方をケム謙ミナト法ミナトしミナトハミナト意虫
のやうたふるけう方も君が何り小みケムの小春
何くくまゆふハ首をケムあさとりケム紹介く

わきもけびよ梅より奥のそ敷枝

そ茶の湯ふあふる雪のひよ鳥

葉白ハ様よあたらぶ深山といへるころろ
ろく梅の奥あふるそ敷枝あはれど梅
此凡流ふ何やうりくわきもけびよハの
何いさつあり流ハけびよといつる細より
そ茶の湯うつけたのまごが方をひよるる
あうとるこ

わが様ケム枯ケム割ケム 枕ケムおの廣ケム葉ケムふ

心ケム見えケムふケムあケムくケム山ケム 花ケム乃ケム花ケム

まきも均不附くはさるゝえち

梅多えく日詠し梅とつくり

東の窓乃 忠葉よつ

桑白ハみり一の山のやまおふとハむ
そぐり何りく花や咲べきといへる若水
院よその清サキ智チのこもバをかりて梅の
花もちりそし梅ハまぐ後ぞけちをれ
日をいうよくらちむとつとろろ之根ハその
時ふのやうんそかハ何りくハとつ
かハハ水ハ新の根ちり

川ぐぐと復の花は神ふちる

ひとりツ葉を梅ツムのぬつた

まことふけ根ちりハ桑白をたまけらる
がらまぐぬさよ何らぞまぐぬく根の葉
トかたけ白のめくちるだしアぐと復
の花乃神ふちるハ根のぬつたの空
梅ならで外ふつとがやひしりつ字
つぐふよくたまりくちりハ何り嘆む
るハ何まり何

梅ツムまよまふく者シの友ト花

たぐい凡の的くあれはくろくまのつらまをこ
ちつきごと首の月へ涼しとさう何のま
布中のものみるひなうらば暑うらめか
ることつをたぐへずお白さゆく見さ
灸くさゆめく後まははりさるる
涼しとつふハ山家の紙を
灰汁桶のまやとらまきぐ
渡りまきりく音麻さるる秋
お花白シヨウ葉ハの葉ハを見く紙セキ寂く
暮くバクの顔カネをつけり灰汁桶のま

と海やめバきりくまの鳴出さるるつらハ能
くまきりく音麻さるるをれものやいり
たあるぞ
芽出より二葉ふさなる柿サキの葉
白田の花ふかふる卯の花
公翁ままが藤杯今ふ滞あの時依
借ちり葉白ハ藤杯舎を顔さるる
紙ハまきぐま場ちり
まき葉の儀も何まや生大根
みづけしと籠る小室のス標

海言

上

首もくくら吹 帷子カケラ乃 絞シ

時分のつけあり

新あまはつぎとまゝ 欠ぬ首カハ逢デふ

まぶおぬ屋の穴たふりあり

係の糸絆の尻ま〜くわくの情を〜

いふとりし句あり

帷子ハ日くふまきまぶ 野モズのま

紐モミ一針を 縮のこぎに又

かこびらのまきはぶくちの尻ハ野のま
しきりふて於タハよふど涼〜るべし

服もろの時分を何と〜縮り時を〜
けふゆりけて縮のとぎに具ふ紐一針と
よく在ふの根絆をのべたり 在ふのま
れ公府のはら〜ハは句を〜ふ〜
むべなり

西ツ佳ル乃が〜らを何ぐる粟の植

秋晩のや〜まゝ 魚も〜と〜りが〜
ハ何ま〜く〜海ふ何ま〜ゆ〜時 粟の植は
中よりぬつとふ 霧のか〜ら〜何げた

らむハめはまきこちやとむまべて附合ハ
二句一首の奇と見るを——といハばは解
もかく一首の——くはとさるこ

残る故小給美てある。秋きくま
餌らまながらふ足さる。深結

時ふと場ふとの深あり

秋のふれ先くふはるるを

と秋ふ森やうう。秋に森やうう

係の草新ふて甚洒落の深あり矣

句ハけ先くも秋晩の海邊やう人里

まてく家も見えむ多むいむをだうゆまう

ささぐーはうむーたありさまあるを凡

獨のひより旅と見くかくハつけるるは

えし豆の花咲ふりや。あるの縁

豆の水鏡乃けしる。海川

場ふらるがめー正凡のさいた。中なるべー

猿の美ふもれくる。おれ乃松をいハ

日ハきりれど。志づらある。ゆま

花句ハ猿の美ふもれくる。時の白なれは

その猿の美ふたのれも新く。おれの松を

まじさげぬしとつよそそろちあらむり紙もろ
のころをいつらひたる紙有り

第三の歌

詩何きむど年をむけざる河俵に

冬^{ホコ} 湖^ニ 日^ヒ 々^々 馬^{ウマ} 小^コ 駕^カ 馬^{ウマ} 裡

干^{ホコ} 紙^ニ 夷^{ヒス} ふ^ス 糸^{イト} を^ヲ ゆ^ユ る^ル ま^マ ら^ラ む

紙の影もつるめくこの時ハまぎく風ハ
入らざりし時あるバのちふ正凡のま面
目ををいらしめる時の依替ハ何ひぐく
紙古洞ともみあり粟^{アヲ} 狎^ニ ともつ小^コ 白^{シロ} 毛^{モウ} 毳^カ
句^{コト} ず^ク り^リ 牙^{キバ} 三^{サン} ま^マ ぐ^ク 漢^{カン} の^ノ ま^マ ぐ^ク 々^々 よ^ヨ つ^ツ ら^ラ り^リ た^タ
る^ル な^ナ り^リ ま^マ べ^ベ て^テ 古^コ 洞^{ドウ} ハ^ハ 漢^{カン} 語^ゴ 詩^シ 語^ゴ ち^チ ぞ^ゾ を

詩
上

三
三

多くつらふるをめぐらさるのふまたり
ると見えたりは水どけ花白ハサケ角の世の
詩哥に何をぶ人を何げけりたるよて
三もろのそろ何れといつりいづちあらむ
ゆ雪ヨ乃こもも薄もくゆる
雨相ふまこくも教於教のめ
聖と葉まで尋る蝶の羽をんく
家くの冬の日ほ解よまづらくゆづる
水仙ハ見るるを春に花たりめ
窓の面目平ひらく葉且

赤猫ふのら猫過る 鳴りびく
花白ハ水仙ハ冬のもれなきども冬のいそ
ぎよ見るるもあなくて春ふありてころな
が欠たまといふころろ花ハ花白ハ葉且の
ことハ花あはれども早まると見えく葉且を
つけるるたら花ハ三ハ花まこもも葉の
りかきめたりく猫の意をつけり身三
の詩一やみふがのめ
梅たえく日毛一 梅いまく
赤の窓乃虫葉ふつく

行合
上

三十三

巢の中ふ葦の顔乃並びぬ

吾白狐ハ先ふ解したる海ゆめ之牙三ハヤハ
ア狐の物ふよてつけ志うも吾白のふふ何
らぬやうよつりたるもの之牙三ふがざらぞ
まぞう附白ふ三句のわくりを牙一とす
室山灰やいらに悠とハ思り水ぞ
雪をともくなきおまがらの松
海士の子が鯨カシラ告る貝吹く

ありと之狐ハ吾白の物常のふま何ら
ぞおまろく住たう何ぞもたぐ
人あらむ雪中の寒おま懐子うちぬ
おまがらの屋の松ふ雪のかるをたがむ
るまぬもの者と見たり牙三ハそのふ
をいたふさく狐の松を浦をさくり
あ海人の子らが見吹く鯨のちるを
告るるそ之附合の本旨みるりめ
葦の陰かこばみの花めつらや
おくやたらむ危ハキヤ木

附合 上 三十五

七夕の八日ハもの、はびりて
 吾白ハ何りのまゝなる、群衆ハその始ハ牙
 三庭の筭本をたゞや掃むといふを
 目星ハ此後然とてたる、空の又云
 あり庭ハ小毎握カキの糸たゞのちらりり
 了七夕のたゞりを見ある、風情ハ三小
 く見えたりも花の陰よりちとさだ
 各人の心陰心をつくべし
 小傾城コケイセイゆきくちあがらむまの巻
 既仲たゞり子かみのたきもの

吹去る袴のひどはあらしみ
 吾白ハ其角ありか、ルがんとあり、溜タマリ
 不フ羈キ少く世路を為ウスむじつぬ小吉原
 たゞり不フ羈キ少く世路を為ウスむじつぬ小吉原
 りのを好むるおけ白何りまゝに、水
 が布フ情の白あり、根ハ吾白を一擲イチ千
 金のキム公コウ子シと見えたり、既仲たゞりもの
 まる、驕キヤウ奢シヤ者をつく、小才三ハ何の引替ヒキて既
 中ふたきものまゝハ、ちん人あらしみ、
 けをうき人乃や、まふとりた、たま

もらぬほどくふうぐふよその産
火をうつさるる冬ゆづらひま
一季の侍り八重にたきすわく
五白八徳人のたまはるそのゆふて火を
うつさるる乃行唱の似海ひくるとの
ぞく清茶の藝をつひ才三八農家
とわたりて冬の雪も秋の月と空
欠きを三句までつけしる
厚ぐぬも志づらふきけはらびすや
酒走ひたらしふはどろの月

藤袴 産花 藤子めでつらむ

五白八徳の産花と見くさるるまはかくむり
花の産花と見くさるるまはかくむり
花の産花と見くさるるまはかくむり
花の産花と見くさるるまはかくむり
花の産花と見くさるるまはかくむり

産花の産花と見くさるるまはかくむり

いつきののそふ帯おる 禪

夕飯くふ帯が 帯面に月影

五白八徳の産花と見くさるるまはかくむり

付合

三二二

飯時あり

蒸や〜を又習ひらよかつて子
市の子どものまゝなる面布

日にもてふまをならざる涼〜

霞句おえな〜旅もろのゆふ之方三ハ
旅みとりあり〜夏の暑た申す涼〜
新〜とあり

洗足子実と名をつくきさらな

後飯ありぶあむき乃里

みるべの階子の溢を〜ひ来て

きこえ〜るま〜あらむ

薊株や水田の〜乃秋のそえ

きりくる日小代〜る

衣〜つ袴ハ馬乃き〜

粟白田野の秋色画〜〜飯ハ唇を

を〜く〜の〜りオ〜〜を〜

たり〜い〜衣〜つ袴ハ〜

の優艶あるを〜ら〜のき〜

〜と〜替の詞〜を〜

たる〜際何〜人の乃ぶ〜

年之志を盃に 秋乃花かむ
昧ふのこころ 花に世のおがら

春の月より 暮る人よ宿り

花白に主之の 佳興カケウに曲水キョクスイの宴ユヱ乃擧テウび
さむしたむきたる之 旅ハ其夜ふ平家など
かこり出くるは ちあるりオニハ 將ドてまづら
たふる向ふこし 何ぞハひこり月よ對して
花に世がさなるし ありお其おハ 凡俗のえを
人をこめて 興ふ海をたふる ぐうの 花に世が
きくもせぬさまの 軒イニキ高し海

入くる志小もの ちがごとく

秋妻ハわざと ちがめぬ首 年々
まのぐお 柳屋のや ちがうなり

馬時のこころ 出さ 梅ウメの夜み

花白に主之の 佳興カケウに曲水キョクスイの宴ユヱ乃擧テウび
依諸あるべし 白きあを

雪の松をいれ ちがれ 花き

日乃出る 春の 春さあを

下を者をいれ 船 候ふち 候く

花白に雪をいれ 松をいれ ちがれ

そのりー死をば謹むに何まりあやぐ
はまぐらぐよき句ハ解をむくまハバがいつて
第二義ハ後才三ハくゆりき名高き句こ
公おこの句をかぬくをらみれきくニま
まできまぐらぐがつひふこの巻の才三ハ
出されぐるとなりゆめき句ちのまぐべ
西相ふ今ゆくや水汁ホクの星れあ
笛の音水るにうつき乃橋
いと番ツガ雀のまぐ森る松ありく
桑句解もに古洞なるふ才三ハめでた

ま正風舞あり 雨も又松あなり
松放ふくくひ何げるみそ水ハ
待ねもーろくはゆるタカ民カシ
ひくまらねぬづるフカ言ハ下子風冬
桑句解ハまきこえたるまの才三ハま舞
なま句意いつぐちらむ解をだ
いろくまをる川まゆるタカ嵐ふ
あのみまきたのまおふがら飛
大解れろぢぬちみく小て
桑句解冬のゆめりーたの才三ハま

ふる凡のたぐ中におのちらりておるる
くらすまぐまぐべうだまほくらむとまほに
こごまーまほらく口をつぐむの

牛流き村の内とぎや五月毎

すまふさき地 梅 燈の花

一枚の芝ふに登森村 何ゆ

舞向へりづあまのりをねおたよ

あふをまねお解らひてまねの花

ふがる向まー ねは真ふよて村のな

くさ梅燈の本あまのぐー 才三一枚の

芝ふ居るが小くめい 小登森 たる大本
の陰涼ー くりぬだー

美木屋水をあけ出く瓜の暑さ

野松小蟬の鳴さるま干

かちその持まぐりの人と吐ー

舞向照つける瓜をけま屋の何つは

悪ひやべー ねぶくたるりたま才三も

の何くりあく 徒置まぢの吐るまべー

うはり 手箱の種あまの旭う

層もたるふきぞ 海池乃水

白壁の沖より 礎うちろ矢て

みそ白のち代のゆくらなるをいりよめでたきり
ぎり之根ねもていたゞりたぢつひのた
れどそとあくらよハねんきよいつひたりか
るめでたきち代ゆくらなる國とて厚も
え奈はぎとつよくらとオニハ引持どて
白壁のちよりお出せる礎の新しとな
まじいふねちつよふ何らひなり
松風小新酒をさすはねきか
月もかたむく石垣のち

町の門返る、麻乃 承とるく

三向とも白き明らなり

竹第四句の歌

二十五条よ曰四句めハ洗更大りの地ふく
軽こいよハ祭句根才ニまでふ昔おこる
おこるべーにやれ句まゝやうにいひあつた
まご一巻の赤な化け句よりたゞまるおこり
お一合とハ洗一たるるりそく
齒^ニ朶^ダの葉を初持人乃去る夏て

ふの虫つ 茂おー何けの春

才三ハ早春ふたぐめて持さるる人あは
齒朶の葉を矢のよふけてゆくそるふ

らむりろの持人の獲^{ユキ}をそ何ひて園のや
たのどふたぐまるる時ふの門をぞーぬる
りーきよもこえ又ハけ持人ハ侍朶^{サハライゾラ}のわぎ
とーりあーたるやーにもきこぬらづ水ふ
たろろハあくるこままのいけまき場不
をつけたる

田^タ中^{チウ}標^{ヒラ}わる 持^シの葉乃何こるふ

ふ^フか^カ宿^{シュク}る 竹の中道

たもーろき附合あり才三ハ持のよわぎ
のゆるふこままとハ思ひよるまぎを竹

の中乃宿世ふをれものから家よて何
がー其あどが跡のまきと見むとて思ひ
てこさをたるを一扱の宿きしころあり
りい田標りるおふと家といつまがこきを跡
といつる一字もく甚しういづるを

かへる鴨かへらぬ鴨もけいさく

七シキヨリ時山をさ出くる月

たぐりしさをつけると七時山と山の名ふ
まゝる後い何し山をさ出くるもよむる
水せきく屋森の石やあふはむ

おほし 跡のまき生うきあり

才三ハ在ふより何よりふて家の前に
流る川あり其川中石をたきく其
うまゝ屋森あるはま之四向めはまくに
其何よりをつけくるものありがたつりと
つけるも一神こ

月出よ跡屋をからむ酒もちて

民の宿のけふる秋風

才三ハたよ跡やとまりて酒をどの
何ふななるがと音の月乃たや出は

酒竹管もちくく 依の罪を吹りて月
を見むとなうちうちつれゆくき四句
めハ罪をハ武備^ゴをなふるふくくわりも
月見酒もちりたなどの花鳥何るべきふふ何
らざるを恭平^{タイ}の代ちあれどそ罪を
かりて酒も里ハあるれりあるるよて民の
かまどハふざハひよりりつるの可をふも
たるありかつハ艾秋の豊秋^{トヨ}たるをも
るるべし名人の^{シユ}段^ア山^ニ一ふゆらむや
村るふ市の依を吹りて

町の申ゆく川ねとの月

オニのけしき村るふ建方の吹そひて市
のかりを吹とらるしきさあめさゆめぬ
句めハ意の面ハまどかとうぬふゆぢぢの
けりげたなくまある。月くあつてあつて
さだりゆの方風大るもたちあちりて月
のてりまやうくあるまどて町中の川ね
りよめてる悔のりきつちが
旅人の^ミ風^トかきゆ 春さるく
えたも なるぬ方刀のひをいづ

才三よき向くまゝとてふ依借のをうみ
たのむぞく四句めはその人づらをしるべ
たりまじく附句にがふるるはふさうらふ
くぞく風ふと念ふものつくもものあらば
いつも附合ハ初らぶく正持るるべきを
乳ふた刀とつけたる依借の彩しをまじ
さうたのしを志るべくは依借のふさ
あーくまー

掃よとて消る雪をやがらむ
石のくぼくに墨^{スミ}成^{ナリ}摺^{スリ}り

消くる雪をうみく掃よとてかきよ田^タを
風流のそとを見て石のくぼくまじりて
まて雪のながめは依^ヨ寄^ヨたをどかきよ
ーたり

投^ナりてま^マ咀^クの編^ヒ摺^シまかこめて
風^フ呂^ロ林^{リン}火^カふゆく月の明^{アカ}ぶの
まこえたるあはれどよき向く

野^ノ屋^ヤ火^カの火^カ濃^ノもゆるま向^{ムカ}ふ
山の阿^アたうて乃^ノ持^チきこゆあり
才三の春^{ハル}ろにけふるよて四句め奉^{ホウ}乃^ノ

自^ジ言^{ゴン}

三十五

句ハあるまじど花のづらなる。春のこころを
まどろく季の句乃後句ハかくあるべき
ありあり

之般入ハたゞやぶつりて見をうけて
るむづらとあがら 第一もつあり

人晴世継二句のふるふつくさり

夏冬ハえなく橋をうけゆる
門小顔出さく 月のたぎくれ

第一三いはなる。おふたハえなく橋をつら
ハるるれどたどおくにくけハづさる橋

を夏冬ハえなくと花をうけつひのなる
まじど四句めハるのこころつりをとさきて春
ハ花のため秋ハ月のためよかけの橋よ
て夏冬ハえなくあらむとつけたる春の
あり一旬のこころハ下屋敷などい
門小顔出さく物をさるはあそ
於凡にむらふ合おれ喚立て
返ハ手のこころさる。生もの

はさるこころもなうらむ
家が著物を春のよまきえ附

上のたよりには、何ごの茶の壺
これハ炭徳の一辨あり、家老の徒を春
のよきまきふとより付くる人ハ茶ユメ商人アキムドの仕
合よくく、買とむる茶も、此方ハ壺上り
まゝのたまへ

竹牙五句の歌

雨佳見る窓の月かきらなり
風吹ぬ秋の日カキ瓶フシ小酒なき日

古酒ハとくくからのけをとりたり、
お旬ハ、商人などの窓、お酒ドウ望ザし、く月下
の露を、あがめ、あゝ、たまへ、五句めハ、秋の
日乃らび、くきに、風も吹ぎ、瓶フシ小酒、は、一、なき
寂サビ莫ムのり、た、之、瓶フシ小酒、なき、解トクど、待マよ、よ
く、つ、ま、り、なり

旅ハ、ま、に、窓、を、や、つ、き、れ、も、あ

竹牙

三三

三
四
子

三
四
子

買ハむ月々海

四句めハ朝敵テウテウのためよたくりはひくひろふ

空を流しまぬらま耐ナ松マツまめらさ

ふんがくしきある軍虫のたもくげと

め残よてまろ買べきた取ハ捨買子シ取合

たのるになふ人ならぬ人トとさうトり

七ナナ晴山ハルヤマを出イりクは月

断ツづツりリ粟アヲのノこコげゲるル 砂スナをヲけ

きこえがくしき

碎クくクきキ人のノ宿ヤドふフりリつツく

けケのノ賀カれレいイでデ面オモ白シロやヤ能ノみミがガ舞マユ

お白オシロ酒シウくクめメがガりリてテはハめメのノきキをヲま

賀カのノ世セとト見ミるル附ツ合ケちチりリ 老ラウササ子シがガ

ちチのノをヲあアくクめメるルもモ何ナニらラむ

いイつツりリ鳥ト帽ボウ子シのノぬヌげゲるルまマ凡マン

成ナるルやヤらラ馬ウマ乃ナ何ナニもモ何ナニもモ何ナニもモ

四句めハ身ミきキ人のノ世セ何ナニもモ何ナニもモ何ナニもモ

白オシロめメ白オシロ馬ウマ驕オウヤウくクくクびビとト子シのノまマをヲ

をつツけケりリ

かカ日ヒ平ヘイたタはハまマるル 石イシのノまマをヲ

子シのノまマをヲ

三
四
子

まいら戸ふさるる遠うくる夢乃月
四句めさへめくはびーさふと見くまら戸
ふさるのりひかめく人も住むありける
吉屋敷乃はまおさごきささおの香
灰うちた〜くうめ一枚
まのぬいねもみらぎふ自他はよ
たのきき伴勢ちをどふ下る時いらつもけ附句
を思ひ出〜く涙もこがるさぐり吉人乃
志と〜くなるぬり句さハき〜るま
なれど道中のまぐ〜目茶

たあらぬ〜く〜十の子
よ代種べきものをはま〜く子の〜
お白十の盃あらべたるハ女の酒もめよハ
何らで子の白れ盃あらむと思ひ〜
つた人の子のぬよハ何ら〜とせよハの
針ふつ〜り一句も〜れま〜る白め
て〜めでたき句あり
ゆ降叶ま〜る葉を〜
鶴が〜るこやがて〜水の月
四句めハ葉ま〜りの葉を〜

梅言 上

四十一

家ぬふゆる夕ぐれのまぐて五句めハ何
このもちやくたぐれと見ぐるのまぬ
向るりかくまらしくとまゝえやましくたぐ
このや〜れ〜ま〜もちうらら何の句を
正凡のたぬ申とりよ何あ〜とかる〜ハ
ちのみそ

お市ふ人のたうる夕月

本刀の音ききえくる居合ぬき
伏見大津なごらふニヤウト都會シヤイの何りきな
絆キナをよ〜

上のたよりふ何ぐる采のま
音の中えら〜とと〜月のま

第四句の款につめく五句めもやりり采
商人の日和の晴ハレやふ價アタヒの高下を考
るはま〜世よおウツほヒ〜よもの〜は
まどろい〜とま〜ら〜ころあ〜れ句
のねま〜ハま〜え〜るま〜

ろつこのぞげハ酒サイの中チウ
藤ふは強も藤て居ぬ音の月
お向一石の〜ちふま〜と〜なる〜年の

はるるをけしきりくつこのがけは湯まを
えの中とありきむめもその地を新うた
ぎ奥の産ぬふめいつく乃森不致つらあ
がら人のしり森てある者もたなく月まむ
うひくはのこぬこつけるこ

混雑の記

既巴洗ふぬより粒のくぐり
粒よえ河をみるよ紙衣

あのもいゝるめくみあし栗のゆほは解し
かきさありあ向極越の志と見く粒
送り鳥帽子をぬぎく紙えをよる官
を辞したるくくくする附たをらむ
あへは返さるが肝意を大集子

雷鳥のゆきるは音ななるあらむ
あ向は韓遊之が潮州にありける時の心

はる伯夷のめき潔ツキの人も足ハはふなら
むと潜カクレの何之益トク泉イハを益井トクイとかへる
も依ヨ潜カクレあらむ

嬰アトボの森モリを母ハハふけまされと

つひふホツ人ヒトあつらぎぬりしを

お向ムカふくつみくろくも出デぎりしを
嬰アトボの森モリをふさえむあつらげ何ナニたるを母
のきくごめくる辨ハカ之後ノチ向ムカまぐふ甘アミの飯イ
つけてとても恋コイし人ヒトに志シこがれぬ身を
ハバせろくちまどりりてあつらぐハもむ尼

ふあまて世ヨを念オモひてふれむたの森モリをふい
ひくるを母ハハのきくぬるきくさぬふくま
けめあまするしゆをさめたるたもこ
ハまくる一粟ヒトコあつらぎあめ向ムカしゆハもむ

擗ハキ体タテかざるもあつらぎのあめ

寸ツバ法ホウ河カを水ミヅの衣イ乃ナみづきふ

二句ニク情ナリ替カなりあきも吉ヨシ調テウ

月の神カミかろるぎキ懸ツルる縁ヰの上に

鳴ナリの羽ハまづるおハ保ホきたる

鳴ナリの羽ハまづるおハ保ホきたる

恥しらぬ僧をいぢり草花

月の匂さつめく 蕭條たるふと見く 町の御
さるふおあけさるりきをつけ 後句替ドて傍
とらあり 暇がり 後の世乃こころめをまねん
ぬ 更には海をさるる 岸のりらふとらふに 清替
あふれど 岸に ありふたものく かげりこさる
ものふれど ありふたものく かげりこさる

時 ぬ山崎 今半 ときを

い 世々のどてらをを 登ふ 深なり
けさるるのもちや

物持のまよふの愛を

一の娘里の庄屋よまよふはま
お向よ愛に 物よや 出ぬふらむらるる
こそと 物持のかこ乃まをを ちがめて 抱思
へる片ま 後句に 其お思ふ人ハ一の娘よま
よ愛ふいひま づけるも おありく 星の光
をにまよふらるる ありむ

鼻 名よたつとつ子 顔を 妻ル里

時 なる 怨の 君と 啼り へり

お向 親あしの 顔おたや くのめく 妻えるるり

句の巻乃中の句よてまゐらちけそのたぐひ
やむぐ暮らみありつゝ。句の後句あり
後の黒細の句ハ詩商人事を金算るは使
くあつゝ。舞句の流れは句のまゐらち干
紙き夷ふ罪をゆるさくらむつゝ。句の後
句よてまゐらり回ド巻も何らぎはれは
黒細の句ハ才四句の歌よ入るをまをうた
ーくけ二句をバあらべらむいゝまひがこ

梳カ原モ友ガ采サ標イの角を巻おむ

魔マ法ホウを使シとて荒海の嶽トク

お句ハ琉球國リウキョウコクちのどの浦を此夷エビスのさきく
後句もその何くりふ魔法をわらふ者の何
らむその附句く

珠タマのらえ 猛タケき世ふ出よ

虎コ懐イ子コ娘メる 何りつき

お句け猛き世ふ珠のらも川つだき英雄イロウ
出よく後句虎を懐りいふまゝを身見て
吐くハきハめて珠のらえを身むとからの
お強ちのどおちりく何るれもくげあり

山寒く四隣の床をふく見
 づづと火ききえく指乃ともび
 いづちあらむ解きよる何とんぞ
 西^イ 依^{カヤ}を 後^{カヤ}ふつてお^{カヤ}何やた
 哀^イいふ空^{ミヤ}城^キの^ノが^ノ吹^フ洞^ツらむ
 お向ハ抱^カ女^メを^ノの^ノま^マぐ^ク後^ノ向^ノの^ノが^ノつ^ツハ^ハ萩^ノの
 ひまこ^ヒま^マち^チあり^リ世^セは^ハ萩^ノの^ノ花^ハと^トつ^ツ餅^ノを^ノが^ガ
 餅^ノお^オ萩^ノも^モお^オち^チり^リて^テハ^ハつ^ツみ^ミ
 みちの^ミく^ク乃^ノ夷^イま^マら^ラぬ^ヌ石^イ臼^ウ
 武^ウ士の^シの^ノ體^{テイ}は^ハ丸^{マル}森^ノ戸^ノくら^クらん

前^メ向^ノみ^ミち^チの^ノ夷^イの^ノ石^イ臼^ウを^ノさ^サへ^ヘ見^ミら^ラぬ^ヌ
 後^ノ向^ノハ^ハ夷^イの^ノ毎^メに^ニあ^アる^ルさ^サは^ハ葛^カ城^シの^ノ大^{ダイ}君^{キミ}は
 い^イり^リぬ^ヌひ^ヒ一^{イチ}侍^{サマ}ら^ラむ^ム
 庭^ニの^ノが^ガづ^ズり^リ火^ヒた^タる^ルた^タる^ルも
 宋^ウ子^シ女^メ五^ゴ玉^{ヨク}の^ノち^チ練^ネの^ノち^チ家^カを^ノ
 庭^ニの^ノが^ガづ^ズり^リ火^ヒ乃^ノ氣^キふ^フさ^サら^ラふ^フみ^ミゆ^ユる^ル後^ノを^ノ
 ら^ラむ^ムと^トい^イふ^フを^ノ意^イ向^ノと^トが^ガづ^ズり^リ火^ヒを^ノ湯^ユ土^ツの^ノた^タ
 火^ヒと^ト玉^{ヨク}の^ノち^チ練^ネハ^ハ宋^ウ子^シ女^メを^ノた^タら^ラぬ^ヌ玉^{ヨク}
 風^フ情^{シヨウ}は^ハあ^アり^リた^タる^ル附^ツ向^ノと
 ね^ネろ^ロさ^サぬ^ヌ定^{テイ}に^ニ枝^エの^ノづ^ズく^ク松^{マツ}

将台

四十九

今半

今半の陰枝かくくうらかこびけく
お白定の戸おろさぬこつよを今半ちりが
仕よりしてあるふと見せる懐白と

衣をたつ鎌倉山の契候一
志ぼるたもと枝白ふ凡葉

お白の衣きどと仲仏ちうひく鎌倉山の
おくふ川こもさたる人ともきこえ又ハかまぐ
ら山の仲仏にちうひをきてたるこもさ
いづれら枝ぐやちあらむ短白いづれも思
ひ入りて志ぼるをもとふ又凡葉の白ひ

白ひまわりくわゆをく心を動いたまがごと
も小せつたの衣の懐るゆ

聲ナゲつつ方ハ鳥 ゆる道

橘ナラの葉よふぶ葉シ枝シの終り

糸白聲つつかふ鳥のゆる清采の地いり
ふも居士ぬぢけ人の住なき何くりて定め
世も人も見えぬりれさかみ葉枝を居
るはよの附く橘の葉ふかくいあふぬぢけを
ざあぬがあらぬあふあふちあしたモ松ヤウ
よて松の葉よとつふも同ドのありはまご

今半

今半

前句ハ恋人の何れかの子ゆめしくお夢で金
ゆめとり森しておーる此夢のもれにまハ
ーくくキキお出いらちらむくはきくはまのり
ほ句ハまららよのま句よてたどおのり言を
つけ総はりよりのお夢のおかきくやいひ
たよのこなきど恋句の次よつのかよれ総
波とやちーくひくひくはらひたるお趣何
ふよく筆かきつくはまや

餅二かさぬえりそよ常

若菜のちよふ子の目れおひらむ

前句ハふお枕のおみ餅を用ゆるよ源氏
お酒ちよども何のオモダケ餅もく何ま小かすれえ
よーきりくるいひあまべー後句ハ若菜
の抱女乃いりひるよとりあーたま
りが庵ハ踏ふよ宿りま何れめよて
おなたやさまをぬふよ身のぬど
冬の日れ依階ハ家くのほ書出くくわ
ーんぞけつけ句を何よ人の涙おゆふ宿りま
庵の人れ髪ハやまきく見るハわりーかよる人
を庵ふかくまふまふくちありといへるべし

きこえぬ卒に母のまことと泣
泣法の曉きく火を焚く

お白中しお卒に母のまこと乃きえゆきを
バもの思ひも存くらめわふ侍に目の前を
御くくかありけたう一ありよべい懐
墓守の火を焚ぬはまきえぬくふるよ
叙法のひきぬとまねが

二の尼子近衛の花乃けりめきく
餘ハむくらよとけりめきく

お白二の尼とつふわめりけり一は
尼の思ひ

からげりし人の君もうれさよのひてみづ
らも尼となり君乃お善持とよらひな
は人ろの尼はものぐりきく人の君
兼へり或はむりハまづり一人の
里ふ下お多之懐向もまづり人の
身ハ懐の祥よまあるとがとち信
今も娘の火を放つ卒

盗人の記念の松乃吹をい
お白ハ思ひますけり一は
たどその糸ををつけたるあり

何れもさの遣ふもとけし時名
秋水一斗もつてさ扱ふ

お向ハ扱まがら遣くをどしと扱るを去
き扱といふむとて秋水一斗とつらふを去
水時計のりあり。一冬の日此依階ハ
まど古油の体真何とくかむつり此
りしるはか

中キ本モク撞ゲををさむ毘登打

牛の政とあらふ事家のゆふらふ
茶向ハ詩人儒者などのからめきたる此の

なめ牛ウシお人の何げつらふ計ハが位行い
とよし

床みけく語れはいとある男

縁はまたげのねと跡ま

茶向きとえたるま、茶向どをりた向く
後向ハけいこのためおむり 縁はまたげ
らねるるのあど思ひわくねあるさな
け二向たれま 傾カス城シロ賣ウ女メのりふと
めれどろ水いろとあふるよころ何とべり表
ふたとてはさるはとつて

明日ハ歌子 首 ねらめさむ

小 三方ふ 子重とらせむとつこひ

茶白ハまことに戦場の白をぬぐ後白を
陣中のるひとくハ何さうだきだて公ねハ
俯向ハ茶白のるひをかへく志うもよく附る
松多しけ白のるひたぐ 恒事のの席と
碎意のたふ小歌よ首ねらめさむの
眼とくさるはまよてゆえたといふ名ハもたれ
化名をぬぐ軍虫ふ何よべき名をさるるこ
様いね小餅きゆる 宝不のるる

望 起し 糸の 燭ともーく

あハハかぶろいくらのおまぶかハもきこつ
小様ねおとつけくハばね女の宝にアヤ
るよりぬらんー 後白ハ棒どくかの松ね
な一まはうち何ぐめさるふの宝とくく
物一るや片きゆををつけくるこ
三味線からむ子破の糸人
道まがらみ法でおりる其久をさる
凡ねの籠人さるだー

月ふたくる 痛のぬれ赤枯て

上

変さぬ 破 隙 隙をまつ
 こゝの 野 軍 更が 解いとう
 しの 一 夫 つとよ 糸 ほつちり
 袂より 硯をひらき 山陰子
 山のたきまのひ ぬくつ 石のりきあまふ
 見えど ぐーがさき 滝 湯 ちりばるころの石
 千 纏うちか け 旋 硯より 書いて ける 水 山
 ちりばるむきぐ
 灯籠 ありふ 小 懐 くらぶる
 寺 跡 秋の 止まの 小 力を 拵 づる 小

灯籠 ありつと 上 小 寺 跡 と 寺 跡 と 對 一 たる
 何 小 あり お 撲 ちりりり
 まがき 近 津 江の 水 小 岩 小 行
 佛 喰 たる 魚 目 ぐ 記 け せ
 つる 寺 の 何 寺 何 ぐ たる 大 寺 の 佛 を ぐ
 ひ たり へ 何 寺 ま ぐ 新 き 慈 向 ちり 何
 く の あり 何 ぐ の 佛 何 何 ぐ たる 寺
 たる 寺 古 坊 ぐ 寺 の 佛 を 何 何 何
 寺 何 寺 何 寺 の 田 寺 何 何
 寺 何 寺 何 寺 何 寺 何 何

春の目

雪の舞乃園のまめづらに
襟子 首の旗が 片波をこく

お向の雪のたむきふ国のみきとる風
騒の人成係乃引うへく 似珠罌のたむこ
みーたるはあり

けーの一まふ名をこがと禪

三日月乃来はくらく 持のさ午

糸合ハ一まげーのさふあたちゆやーを見え
大悟ーたるはくらく 後向ハ三日月のゆるさ

はくらくして禪のごむと唱者ふいよく 禪ん
固をほころえ

まがれ飛魂 花のかげよ入

そのらまれ日をふかもれあーく

花にまがれく 魂花ふ入を西行くくねが
いくは花のかげよてふか死むそのきくらぎ乃
空月の流といふ奇を思ひ出く 西行まその
空のふふ赤死むといりゆるるがたの川もれあーく
ろのふに死たーといへる係の何ゆりそ西行を
くらやしたる公相のさらりてあり

控ら小くく物より知智の放まきる
火にうぬ火カ燈カなた人に見む

赤白に響き鳥小たぐへく人の声くらしる
をいひたる之火にうぬ火燈にうももあま
しきものくくなく人の侍もろつ小何ら
らるべたけしきあらむお白のましくん
たる恋を死りしるる人にしるるつれなく
冬まつ 納豆たぐくあるべし

花小位 桜のカビ微とまてふるる
赤白秋季あは花をうけりてふ

たよものあり白きハハくならむ解か

西セ南ナム小桂の花乃つ不む時
茶ナムの何がら小 茶ナムふつせる

茶白桂の花とつあつし月をまをたよよ白
の根幹からめきたるが茶の何がらの物キ
ものをつけく何つらひたる之茶油ナム茶膏ナム
とて使ふくくあせとぞ

煎ツ多 白シ茶ナムのナム
宣アの日乃且シタをカ煎ナム治ナムのく死て
赤白并茶のまいつちるや又ハたぐまけ

たよみや後白ハ飛流ッ名海くもむとの
いのりや宣のるく起くよ茶よのさかさま
はちまあり

深^{カユ}さくる 曉^{アサキ}花よかこまを
物衣の下子 懐^{ヨロ}ふ春風

茶白をりのまをぐく見くめく曉の
彌ふむらひぬるはまが軍の出立よ河ら
ぬどねぐやちあらぬ世ちかかりよおの
具をたるぐだ ぼえの下よまうちよひ
たるさぐく

砂^サとはまき 葉^ハ切^キゆ

秋の流^リ流^リ乃^ノ連^レ歌^カいとかりふ

砂とまき重の葉きり小出のいづよもちま歌
の席なるべりいづお向のやまのねど
るうなるけまよもあらざれば流のちま歌い
かりふとまきありたるく古人の心を用ゆる室^{ミツ}
なるよる

夏^{ナツ}涼^{スズ}き 山^{ヤマ}楮^{タチバナ}ふけくら見む

麻^{アサ}加里^カしつふおの葉^ハ阿^アむ

お向うち阿がりくるふとりて奇の葉^ハ阿^アむ

は家とつけたるあり麻くりハ何の化名な
まど芦荻とも菘荻ともゆべきを麻くりは
其をまことなふむりかゝる集も何んま
やゝの名をつくりたるまことぬく
籠輿ゆるは本爪の山阿い
皆を見てるる小泪ごとおり一り
穿雲の人をゆるく本爪の山阿いを何ん
神骨を見てりがぬほどあかくかちちむと
かちちめもつともものひとまを原の人と見と
はつけ合ふや

けー尼の小坊まりふうちむきて
をるく蓮の葉あつくは昔の葉
ゆきくろをし
豆腐つくりく母の喪ふ入
えびの草乃袂も破ぬを
ゆゆ小喪ふともる人をゆるのえびと見くる
附合なりえび母小者何り一人
ひとり書をみるるの戸は中
二丁ほど西ふきぬはきくゆきり
ひとりむむるの戸ハ二三丁も村家を入

村家

三丁

だてたるをー

櫓子キの風乃豆がらをふく

寒き知コ小住持ビツガハひとり柿むきて

茶匂チノウいふも荒さのヒツ真マコトーげるやキき位

持テの柿むきぬ。寒サムイがハるがハぬー

小僧コソウあハりハずがハまマりル。

新ニホのヒ陰カゲ出デ小コあハるハのハをムと

耒クニ輶ニのハ新ニホ人ヒト小コ函ツツをカきクあハるハのハを

をク飲ヒきスるハぬハ僧ソウあハりハずがハまマりル

五山ゴサンあハりハずハ大オホさサのハまマと

赤アカ衣イハハまマのハをモてル。笑ウツひハり

官司ゴウシがハ妻メ不フ一ヒト保ホれレてリふ

前マエ句クとハ人ヒトをウへル附ツ合ケ之ノ前マエ句クハハるハの

もチくク笑ウツひハ一ヒト人ヒト見ミゆク恋コイとハあり

後ノチ句クハハるハのハをモてル笑ウツひハをモてル

がハ妻メ不フ一ヒト保ホれレてリふ

入イ月ツキ平ヘイ鷗ウのハをモてル。

駕カ車クルマあハるハ乃ハ露ツキ負ツれル。

いらハらハむハまマがハ。

一ヒト輪リン笑ウツ一ヒト芍シャク薬ヤクのハ定テイ

暮名の工夫二日宵々。目を眩く

おもしなき附合之何ぐとよぶかほぐの暮名
うちの人と半うちけく勝負らつこのま
めむと契りけくあふか一り定のもよまづ
うみ居てんにあざり一よを二日まで工夫
一やりく思ひつきまのあみ目をひらき
見れば定おのむ茶一痛嘆出るる
笠あてえのやぶま綴りぬ。

秋の鳥乃人くひまゆく

け句や人を愁殺す鳥山阿ぞ一ゆなど

のかへをものとも思ひたらで暮名のよみま
一き破き衣成綴りぬ。ともものを見て附
たる之附ぐるにまばらく並て一句のやま
秋といふ字のよくまらりたるはぶくま
はたらりくよ阿らざんかある句をはくよ阿
り

夷人のかさちねむうげろふ

夷の知耳奉来た蝶と身を倦く
玉照君が古るのをふくみくの他く

京小名高し一痛の呪咀

いづくにちぞぞそののぐききとえくるふ淋しからむ
と思ひやりたるはまら

髪下を侍従が娘をとりへく

聖の宮乃何らし一故王さ北陸

面白ハ髪下ーく嘆きわたりふかふるはま

と身々くかゝるりゆえ何の聖のまはま

さをつけたるこ

養老を留教名月の糸

面白の花女乃秋の萩きぐらや

まの拙治郎ユウま何らで風流のたれ人乃

まのげなるべし

川激ゆくモトヒ髪を角小侍付く

舎利とる滝小粒日うつらふ

古洞あしハ解ーがーまべく古洞よまを

洞あらしぬ何里のちの洞よまを洞ありこの境

よのりうつべし

洞激小洒をかく教様屋

ふよの〜〜女小カヒコ髪カヒコたらしりるま

いづるもつげざるよや

夏ちりー田のいろえ乃きをばうり

三聯の船 保川乃 萩

萩のき保川の萩をきらぬが解あまのよを

わざ

花 出^{カガ}あつる 叶^カるぎの暮る妻

いふ時百^モ舌^ズを吹矢を負あがら

田野之秋色

月ゆく寺板山を履ぐつらむ

雨之萩 益の法埋むあり

大盗人の今^ナり^シに^シた^シる^ニ一^ニ何^ガり^シ盗人

の^ナ量^ヲを^モむ^シび^ク何^ガり^シた^シ司^ガ家^ハふ^入す

何く山を去るくたむむの^ナま^カの^ガり^シの^ナま^カ
よ^ク何^カの^ナま^カ

ひと川 兔の尻くらふき

笠^カみ^カる^ル人^ハハ^ハ津^ハと^チら^ハぬ^ク

た^シく^ク笠^カみ^カる^ル人^ハハ^ハ津^ハと^チら^ハぬ^ク

人^ハな^カた^カ野^ヲを^ハつ^リか^キば^カ兔^ノ尻^ヲくら^フま

ら^ズ

風くらき大妻の萩七^ツす

川^ノ門^ヲを^たら^く生^理の^美矢

春^ノ白^ハ大^トの^萩後^白ハ^え日^ノの^萩附^ハえ^ハ何

はよありねがねとらふもくはるぐさのなを
きくしたる

陰ふき於^オ羽^ゴのかづらりりあ道

いさ持くもあふる 瘦 男

備色の御^ミ還^ムのりーたあふべー

うちかづくお糸のまをちつぐい

たのきく天と 巫^ウ突^ツふゆく

ふまハ公羽のこもふも高き忠の句之まことふ

忠の情をつくせりこつふべーお句ハやき

ものにはよあのをちがなつーみといへるお字

より何の川^{カハ}將^シどてみ下^ノふやーくらぬ人のた
はぶれまやーさものよぬびーたるはまた
なしく忠のまことたのべた。えもいひあ
でたー

入日の何と乃星あつてつ

宮^{ミヤ}ちが健^{ケン}持^チつも 花^{ハナ}の 翼^{トビ}

星^{ホシ}ふとつとつ表^{ウラ}のよるまよみえろあたるを

社^{ヤシロ}家のゆめがれと見くさおちがた灯^{トウ}の健^{ケン}成

つぎよゆくまがこをつける画^エも及びど

ス^スキ^キを^をち^ちく^く くらふふた^たる^る星^星

三十一

三十一

此は巴百とく麻守入篠の際
舟を切て管にふくえき人の船より此は
負出く山うげの篠の隈み只ひとりかき
して麻の着をすらちま何くまでえをくる人
ありり

侘ねもしろく 椽の齧者ある

更級の里乃きぬこをおふゆき
くもにたどえき人の椽れかゆ老る徳お
あらばけりしあのを破おふゆくもるべ
露を相おぼく ぼる馬の血

坊主ども老ともいさで遠き歩
土の餅つく 砂よりねろろ

三句ともちだりりのころちや
生の條に燃つく 煙るもさり
日くれて 砂る 松が 切け
山家のやうさるるがめし

ま白あ塩なた飯をつま向く
泪を顔をよぎん 目 せ
前白病者の藤治のためうらむと
見えく 目病成つけるをぬ

舟
土

舟
土

舌根小念仏をやらふ居士衣
小襟ハ縮の中子つくえ

小襟下の片まこ

杖でうつ産路が破上まあり
いぢりふびむや嬢族の月

盲目いぢりを對したる附句とれも又二株
さぬ花は垣根に穿つ草宿

かげろふまき糸の下敷

卯のうさも才子の足徳よ春とちて

かげろふの句ハおの坊ふのちの句遊トてお負

しくきま人のされど一葉もちての田かぬれが
才子のたまけよあひておらまをせをいつるさ
まをま

糸泉のかづら桶のなをま

は本垣のふるきおハ破まあり
まほ意

土質もよむより 撞ハ黒石

と平太の恐びくわき。秋の風

黒石の坊ふをま

坂友さる宵の月がひりめく

冬より西の山乃松回し
 松友ききる音の人くねしあらびたる中
 小西国此のどきよくきりたる人乃ものがわり
 ききに松友ききる人の下とる何れも松回さる
 けまき

瀨子玉子ハ何とらあらむ

山系花の傍ハ水仙 梅 棗

二句ともけきるるハなれどたゞしひならん
 たる之附合の中ハ必かふる句何れべし上
 ハよくやり句をききるときりたべし

雪ふ鞍れくハ貫が馬

やどり七む大江の岸乃ハるま

雪に騎ゆるハ貫が馬ハ大江の岸ふやどる

雪に騎ゆるハ貫が馬ハ大江の岸ふやどる

割るらつて 状のおの蓋

清涼報も先調りぬと雲此沙汰

おもしるきつけ句之度くの状海ハゆき
 人に見るらハ涼報のお後とふまき
 の清涼報をまきしやふつらバをり
 まじき奴は涼報も金ふつきりしものぬ



いよハ借格の秋趣あり

宜松が、ま^ア千 外も 虚^{ウツ}つく

花^{ハナ}ども里^{アノ}中^{ナカ}も 物^{モノ}を思ふらむ

二句をよみていづれもを^シき他あり句を

き^キえ^エくるま^マなる

森の 柵^{サシ} 千^チ 女鳥^{メトリ}をたづぬ

女鳥の居る花は 結屋^{ムスビヤ}とよめあり

け句の^ケゆつま^{ツマ}びらやふ二十^{ニジュ}二^ニ集^ツよ^ヨる^ルは

口^{クチ}を^ヲと^トづ

歌^{ウタ}よ^ヲも^トま^マは^ハむ^ムら^ラ松^{マツ}の^ノを^ヲ年^{トシ}

有^ア明^{メイ}の^ノ梨^リ打^{ウチ}を^ヲば^バ一^{ヒト}送^ツり^リる

け句も公^{キミ}の^ノ名^ナ高^{タカ}き^キ附^ツ句^ク之^ノ前^{マエ}句^クの^ノ柏^{カシ}子^コふ^フる

の^ノめ^メく^クえ^エも^モい^イは^ハぢ^チめ^メで^デた^タ一^{ヒト}句^クの^ノ柏^{カシ}子^コと^トい^イふ

を^ヲ一^{ヒト}へ^ヘ一^{ヒト}句^クを^ヲば^バあ^アの^ノ子^コを^ヲな^ナ一^{ヒト}

敷^シま^マが^ガ糸^{イト}を^ヲぐ^グり^リつ^ツる^ル 秋^{アキ}ば^バら^ラけ

え^エげ^ゲくる^ル眉^{メジマ}を^ヲか^カく^クさ^サき^キぬ^ヌぐ^グ

け^ケし^シる^ルもの^ノが^ガめ^メり^リあ^アる^ルべき^キ併^ヒと^ト

除^{ノゾク}朝^{アサ}の^ノう^ウま^マふ^フ思^シひ^ヒら^ラち^チふ^フ一^{ヒト}

け^ケら^ラひ^ヒの^ノ侍^{サマ}ハ^ハ階^{カイ}の^ノ中^{ナカ}

は^ハ勃^{ハツ}る^ルふ^フ何^{ナニ}に^ニむ^ムと^トち^チぎ^ギら^ラる^ルも^モけ^ケり^リび^ビく

附^ツ合^ガ

三十一

思ひふりたるはまな里のれどけりい何めて
やうく陸のなるはみまのなるこいつあこる
の附合あり一白ハ陸を結て居たるが結ら
い何りく陸ハるもの中ハ陸たれといふや
ゆきとゆ水どけよハ何らむたが陸のなるこ
とをやあーいひのべたこと

京ハ 汲さるる 碓井の水

か 川やねのくくといつのは見えく
凡はのえきんくの水かこの水あをさへて
水をたのむ人之はきばといふ川のこいつまで

りみーなるべー

餅つくる猫の、度菜を折合を
執ニエ見エ小エ笑エる 秋乃くくるハ

茶白猫の茶乃餅つくるをちき汁ゆいと
見くいけよえよ笑る人の何れあるまが
をつけたり秋のんハ秋の字あれが
たろろをつくきり

姉待牛の、一連ま日の教

伯キヤ何ハぬ越の宿キヤを織キヤぬく
姉のまきをを待兼るをふのやうきちん

守
七

扱ふむらひちあぐらお思ひぬるはまこ
誣のそりまて廿五日の並びぬて

卯月乃雪を握るつくづぬ

前句田植のほまりあるふ雪を握ると
りを何いーらひたるこ

思ひぬ半をうとよ 傀儡

途中ふたくる車の心慮を擡て

おきーろき附合之車の中ふぬる人お思ひ
の何る人あるが傀儡のこよま半をきいて
まーやわが身の上をこよま何らぬと

乃きくたづー車の心慮を擡るとまよ附
たりお思ふ人の本懐待うよくかこのごとく
志らむ

老の身此襪をふほどふほりりる

君流りきー海の糸や

前句老の身此ほりゆへ老をがら襪をふ
ほどふたろへこまひとくならざお思ふ人
と見く極老の糸さこーなふ世の中こ
だれて君さ一流き水ぬひー流の糸さこよ
もく襪をふほどふほりりるさるりりる

付合
三十一

らーちよえ

木の葉もちよ 榎の末も 沖を月

つゝけりぬる 嶮乃くひもめ

前向本ざりー吹立榎の本の葉もたらしと

ちよものさざざきりーきを死ふと身くくひ

ものさざざーた後人の何りぬるさうをすけ

たると

心葉をくむとささ 森ぬりーさ

火ふりーてゆるをのこハ何若ぶ

前向川びこのさうひささき小燈ふ夜ふくるまで

森もやらざりーさの心葉とさめるふ小炬をど

ありーゆをのこハ何若ぶささざりーけり

たおふけさる何りさほく山之炬、燈ひ

らひの炬さるる燈ー

はまぐくのまれりさめり月月の歌

人一代乃、恋歌とさ秋

さほぐのかをさめりさすめり次ハ恋の句と

あーく月のおふれめくはむげものがあ

してたがひよをささるた時すめりの恋をつ

まざりものがらるはまこをた強りもかると付

何里にまゝしるき附合ありル里

下戸をにくめる。雪の敷乃亭

早咲の梅なふ身ふたとへため

み雪の敷乃亭に待たざつくり証さめ

まゝが中ふたりく下戸ある。をのこをそめ

たりゆやけま次の向そ氷をうけく。雪の梅

をふ身ふたとへたの氷と。おの氷なほさる。詩人

酒後の懐をいりめ

明安き。秋たまさら。後立ちく
あふよを。啼ゆく。ほく。ぎ。さ。やら

あまをりきつげどろく。前向其の敷乃

の安き。秋ため。ゆりほく。ぎ。ま。を。や。ぬ。

く。後立ち。ゆり。小。情。能。之。あ。ぬ。を。う。ら。ま。

う。ぬ。を。か。つ。風。流。才。一。の。ほ。く。ま。ん。た。か。つ。

ら。ゆ。く。風。流。公。お。ふ。何。ら。ぎ。く。後。そ。や。

前よをむけ。名月をたぐよやハ

せ。る。お。る。の。つ。ぎ。秋。海。さ。り。お。さ。

前向け。名月をたぐよやハ。さ。ぐ。さ。べ。た。何。が。

小。前。よ。さ。く。あ。ど。つ。わ。さ。ま。の。懐。向。ハ。ま。で。よ。そ。の。

前。ら。さ。る。使。の。若。妻。も。ち。て。舞。妓。こ。え。り。

附
七

三
五

附
七

三
五

まがくともよりかゝる所をあらどそ
ばのみつぎばうりハゆるさあらむとをう
ひひたると

稲妻の光くまきバ筆投く
聖中のりくれ片神をまぐ

赤白ハ増居るど一ておろきぬふ稲妻の
光りあるふ筆をま投きくたす
ぐとあらど後向ハお中ハ精ぶくま
りく水片神をまぐとまぐのせつる
物あらかへたると

ゆふを干かるを借る人

命ぞとくふのま可成懐

附ぐるハ故のま昇師の追たりしりのま
くふ下りくゆるあるま昇一と著て故一
ゆるまなるりたる之れ水づろの白れま昇を
懐中くまこまよわが命ぞとちのふうけ
はちまこ

汝ハ干く砂ふみく復たの浦

日毎小かたると家をそあひく

復たとりやすり原氏お復たのまこか

の頂上ハむのしころ人もをみられ今ハ里は
あふいとそろがそくくたど何をもたふ
あくめははあくとも在ふのきぐこハかる
ものなり

と念ふ事とは楢の本乃中

聖ミツリしてアヒシまなぶら此月もこつ

楢の本乃中ハまきと念ふハひろふそ念
固の人ならむとかくつける之西行の撰集
抄などの越も何とべー次の句禪之のや
ふいひけり聖法何とありくモた乃

中の月をもちつと何となく禪之禪徳もまき
とゆゑやに何やあたる之世の依指を注
まきものかゝるのりををも何くの禪後何くの
禪之などけまぐふ解まぐるハ依指ーらぬ
もの、まのぎあかりもーけ句よませよまことふ
禪之禪徳ときばるハ禪之禪徳よてこそ何
礼依指ハ何らどあはよかざらざあひり
あどをふくあゝ句やても底ぐるらよたがる
けく併のゝゆゑよてさうをりハハらちつ
けよそのまのりをいひてけたらむハいとがさ

禪之
依指

三十一

くなぬるべし かくもりの子か時ぬあつてま
のし従論ふらふくつひつ

目赤のりーたそのまき 詩ふ他り

ハツふあゝる子乃顔 詩げあま

まぎくふけつけ句まても何き目赤のりまを
たちあち詩ふ他る才子のりげと見て玉戒
あゝのりた庭ふふくめれどろのりあぬく
ともききゆるやたつらりたるものなりたこ
けつけ句目赤のりまをろのまき 詩あつら人
を太人うくハをりーから才子のり見と見

たるふめ之心をつくべし

小畑片びーた案山子 他らむ

るの戸は馬を 酒 僕ふたさへられ

をのりま附句うくころ何き茶句のち

き風粒のまきくとも見くかぎりまき 應永飲

秘窓の人をつけり日く数升の酒を飲

くくは價奴何がちよりのちらだつひま

のちのよ馬をたさへららゆる之世を酒と並の

間よからく 秘ぢけ人あゝべし

一 臣あやあ 居 虫のなふありるむ

将 北

三十八

い代ふ出く 海苔 さくらんぶ

茶向世の中乃 俗物をきけくろろーりある。
ものたくりかえんぶは 俗り何ふはまをきけん
世のなとつひたる。之をきけん世の家としてせむ
けきふふたといたる。そのありかぬくハるのん
をもふくあり 俗向ハ水色ふ水色をうりて
たぐそのは時ふを何いさるの〜んふらぎ
んちや〜

粉臼の音 ずちがら ちよびき

月をほ〜〜 螺カウダイの 証

茶の向 粉臼の音乃 大なる音をすてもなるり
む高軒かき〜 俗り居る人ハ 高取の位
のズイダ砕石と見えく 螺貝よて 飲やしたる大
おまをつけくる之志あり 茶向まいびきと何
まば自の向よて 砕ぐらよつら〜と 粉臼
の音をきしぬ〜

辛ニ標シがらの 健流る ン 唇次

角 何る 眉ふ 化粧 するの 表

はがゆの 納まの 粧ま 魚のふまき 命じきも乃
老のけりといひ〜 たぐひうつけ〜るはご

将 命 止

三十一

うたふらむ

舟 フネ さらの 出 帆 川 口

標 ウラ 干 カミ 小 願 オボイ ちをりぶ 夕 暮 び

お白の 船 小 標 スイロウ 干 カミ 小 願 オボイ ちをりぶ 夕 暮 び 水 橋 スイロウ の 標 干 カミ 小 願 オボイ ちをりぶ 夕 暮 び 水 橋 スイロウ の 標 干 カミ 小 願 オボイ ちをりぶ 夕 暮 び

けーき

舟 月 小 帆 フネ 里 サト の 娘 乃 川 邊 へ

舟 フネ ハ ま ね く 荊 籠 カサネ ひ く

娘 メ の り 籠 カサネ ひ く 荊 カサネ 籠 カサネ ひ く 娘 メ の り 籠 カサネ ひ く 荊 カサネ 籠 カサネ ひ く

なま ナマ べし を り き 借 船 曾 の つ け 白 へ

わ ワ づ り 舟 標 フネ 者 明 方 小 山 々 々 々

待 マテ い く と ところ 西 ニシ 東 ヒガシ

船 フネ 小 舟 の 山 河

涙 ナミダ を り え 々 々 鄙 シノ の 橋 標

歌 ウタ 名 け づ る 船 乃 名 者 づ づ づ

前 マエ 白 涙 シロナミダ 者 づ づ づ 一 首 小 舟 乃 名 者 づ づ づ

懐 ナツメ 乃 せ つ なる に 後 白 シロ 乃 舟 乃 名 者 づ づ づ

志 シ と して 船 乃 名 者 づ づ づ 船 乃 名 者 づ づ づ

一 ヒト と して 船 乃 名 者 づ づ づ 船 乃 名 者 づ づ づ

舟 フネ 上

舟 フネ 上

なり

くさきまをふてくさちも樹にぬ

又乃軍 成 起ふ 一のるな

くさきまのちもむなしくもくさきまのちも
ハ軍ふ出たがられたのが身ハ痛ふく又も
まゝくさきまのちもむなしくもくさきまのちも
りくく起くもふくも又の軍をるる
孝子の情をつけける

三、度 ぼ したれ 勅チキの土芝

山さるが車ふけづる本をさるひ

かれふ酒何くへとみことのりぬふちからけ
を三度まぐほくさきまのちも
思ひよせて山さるふたまりりさきまのちも
度やれく月ハむりくの親あがら
老むむくむが衣うつさる

茶白ハ末摘花の巻乃れもりげをさるふくめ
り後白も其切之

道のをこれ松ふ一喝イッカッ志めしむ

長者の 塵チ 習シをたあげとむ

茶白ハたくまき 禪僧と見く 長者をさる

の教ともせむ。壘ふ習を投こしたる。粗慢
此をぐくをつけり

廿ツバ六クラ 短冊つけく 於やり

氣 蓋を 脊負 けぐ 臣

つばくらふ短冊つけく 放ち氣ふ蓋をる人

ハそ何ぐー 大主をどつふもの 捉びたるべ

しあれも 何の對附なり

琴 強ちつらふ 定ふよらばや

お控る乃ましく 粟の名を忘ま

附ぐ乃ハ粟をもらひく 極る乃ふ狂々のぬ

乃きまゆ。定ふうちよりく たるぬ。旨に

大りのの粟の名を忘れたる。之前句優ユウ艶エン

なる。なふ次もやけしくつけり

酒ふ ぬい 何。 友を何つめ。

ぬ けゆる。又の一齒乃かちりく

はつけ向翁ふたふき 換なり 其の句ハたは

ろく酒のそくら人あをを引 踏ドて 答

齒のぬけゆるが かなし ひとつけるもの

はれど 吾理あらむ 又の幸賀 或ハめで

たは おふふましく 又のよハ みのかくぶされ

待合 上 八

体をかたしめり孝子の情之かく前句ふつふ
れを引と取りつけるハ名人の子段なり
去このれども如論前句の挽標時のよろし
たふまゝさぶな

山さるハ登も 狐のけまぢろく
花とひ束やと 酒つらほら

登も狐のけららるるさるハのやど山さるハ
見く花ふ人のとへり酒つららむと
つよつけ合之お句のころよて山さるハ
のちひはさるるといふも後句より

将どく大地の山さるハはらさる

白きお標の 垣を 飛らさ

指たりを標の 板ふりぬき

前句春日のけらるるにびらりくお標の
垣を飛らさけまをそ居あて見くよき
日和哉見ハせて指りりえゆらひあむる
女のゆりげをつける

湘なるた記念の 鞆 ちるも出さ

何も 焚火ふはつらり

前句ハ天鞆といふゆるもゆの侍之後句ハ人

ともーびの氣めづらーたきのえ待
 も持のよふ顔見たりみもくー藤もさぬやう
 きをさのえ待と思ひよとーいふ人
 いうやーのえも志つべき存實
 此記目をかえろー、出るもあお
 古きのがくりもあーぶそねもうがを思ひよ
 せくー此記目をかえろーあおより出る人
 ハ何ーの君乃いろものこなるー
 陰ふくー下るんおねぬの坂
 宗長の真寸 白も筆の條

附えきこえろーやよてー一際ねごやうなうす
 綴強き袴ふ秋をうちねと
 此買の白髪をりは見付たり
 前句袴の綴乃強きをうらめるとつふを秋
 の字ふ心をめくーえの身ふるぐんむつ
 ーくねがゆる人の老るるあかりとつあふりて
 えドめくー此買の白髪をり付て老をぬき
 ーをつけろり
 わが顔ふさぬりたりたるおまの花
 此ふお鏡とつアーさうづき

附
 此
 買

梨の花のもとに極まりなき人あらば故様と
いへる盃ならむつけ句のひびきぬとつ子登しと
てよハ係の化名あれはいうももなづくべき哉
故様といふよて新ふ花のちりかふるりた
ころがぬー 美ふふりく味ふべた附句と
蘇東あつさく里ハあつるとあつらば

粟 稗を日毎の ぬふ喰ひ飽く

ぬふといふ一字やて僧とさるせりもとより
も捨身の行あれはいうなきは里いふなきよふも
つるべりれどなきさぐらよ肉身あれはかこくるる

里ふくろとまらば毎日の粟稗ふくむじ
果てはちまいとをう

け 秋も山の板橋 岩氷りり

赦 免ふもゆるく ひとりりる月

赤白垢中しく小家の柱も岩を柱木も朽く
山の板橋も崩るとつふあさましき不を死ふ
と見て赦免ふもひとりりりのとちまき一
人をつけたる之像實が傍も何よ
もとの廓ハ 畑子 獲るる
と重浪乃春も一かふ何らたまり

あり

何れ時ハ解ももるの入ぬらむ

樟の小枝小葉をへだく

入居たりある之後向ハ解といふ小樟をつ
けく葉を何つらひたるえ

霜降山や 各故友おもうげ

何れハ軍をいさるる外よ来て

山ふおのりく水何れはまを故友の面影の
おろくありといふまきき解げたるは不

をろのまいつけく軍の出立をいれまで運

りくつり水のほまりたるりく

引雪車ひくめの有て

木のく 武士れ冬ぐもる宿

前向ハ小越ホクエツの大雪なるべし後向ハ小園の
城を攻むと大軍たろひまらぐもかの大馬
小馬の蹄跡まぐも何らぞむなりく武士
れ冬ぐもりおてまをまつまぐくもや

空小石水くき急死く

自枕干面き枕をけり入く

お向たるけちなくまのいほ涙をゆるら
まぬらさし女あり後向ハそのまのふ
めくわりなき契のほほど何れ
住かへる宿の柱乃月を見よ
はる何れらむといふ糸が短
いふも解が

た山つごこのまふ
洪一さや洞ちもきく
附向もつけまきとえ
ありつハ何れ入る人もなく
た山つごこの

つちなるべ

花をたふす花をみちびきて

酒の迷ひ乃 けむる 春風

糸向ハ馬ふまへて
後向酒の迷ひのけむる
いと花をみちびくとつち
とびくをたふす

馬市ハハ 狗むりへさむ

惚ける父が馬をとりつへ
附ぐる馬市ハ出るほどのもの

附

なまいりれなるれど駒むらへまいつもくし年
久しく出る男ふりて父の代より傍りたる
弓心糸をも持つてたる古き家あらむの
雪降ぬ松はたのれとふとゆりし

秋 踏 志 ける 杖 乃 妻

糸白何りのまき之後白も深き山と見てい
のーと思ひよりたりそ秋ふむとつふより
妻と通て志わづをさる之にわらへまきげど
ものをかくやちへくつくりたるは名人の事段
あり

蔵 洗ハむとまあろくぐあり
さぬ花の令ハ衣をい息をぬ
いりなる附ぐるみや

牡丹の七下 風不のりあり

老僧のいで小盃たぐめむと

古句園の牡丹乃夕や海をふくめるふら
ろよき風はろよくと吹けーきいりよもなる
の庭と見ろく牡丹見の極もりをつけたる之
秋更ろく枝子小かちむ若年の心立
くひままきるみ波の谷段

持子の何ごころもななくく唯れ可くいひす
ほきよのりれなるはまをのづるつげごころ
ならむり

此様のをろふ見ゆる 舞火

奉執供水の者も 誅ふく

此様のすろ小見ゆるは舞ハ供水の者をとるな
らむとの附えふや

牛の子小おろなるぐさむ夕暮るん

ぬ雲ま——ふとろろの 唾

きくえがく——まひくくさむとさくらばれろく

ハひがきくせむ

松むさをびたしく 必の境目

永楽の古きす頰をいたきて

永楽の代よりお朱平たまりゆく寺頰

トウヤク 千載のすなるべ——附えはきくえたるま

たまり

捲上るは登ふ 兒の遠入く

わづらふ人千 昔る 秋風

二句のユ合漢も落ぬ——おすを捲上げ
兒乃遠入にうちよはその母をどのやま

たゞに秋風をいそひたるはるる

子 豊 蟹いとちむ山陰乃塔

様多村の浮世の卯は春あて

除ささるるをうたぐそのをを春あて

星みふる歌なふ歌友のかゝるこ

まふ年 拙女の名をとむむ月

共の白の星みふらりき人ふかざらだ歌友にき

歌友のかほまぶくみふるこ之後白ハ七夕みふれ

なく一舟のうゝ或ハ吉人の一舟をまて何とて

のちれはまふ出くる拙女の一舟歌友とて

かついやーき拙女もても舟をまてめづるあつち

入りく名をとむむよとてうらやうたうさま

あゝよべー

はまあふ出く家路忘る

ゆふと咲本信をこ登のわげらひよ

けのこむゆりな

雪みろれ沙まの市れ名跡とて

傳いその日を 雪の後のあ

傳いその日ゆふ居てもはるがうとて雪の

あめりく雪のあめりく一依階の連年を

つふものなるべし 俯さるるの明らるる

やもめ 鳥乃 迷ふ 晩鐘

平つゝも 聖も 越なき 花の峰

俯意ハ長旅のりふもくれて 聖ハ又づくの
つゝもこの山年をこえむと思ひのやめたる
うちのさるるーくやもめ鳥の宿をさして
まじぐめま子をたき妻よたる水へまき
あよたもむくすくろがろき旅のゆふ
ぐれちのらむらけ水どりのけなれがたぐ
むくもたやーとのつげどろ

おくふ 娘のお乃 指つゝ

後子 づつれ ちまりらひ顔

これち何の箱の附合之茶向ハかざりたる
ねごとも 指つゝなりりたるをりらひ顔
ハ後ろつけねむまりもくつきたる向よえ
おくぬねをいひつゝくくけいたぐひれけ
あひくくわらひごもなるるををて女の
たよねやきとるんふくくろをつゝ
録の羽をーむ 幅の糸
春ぬハねるる。 兎が 後めく

待の去年乃ききゆるふきぬたを観て時
と念のりゆも何事と何ふたのびらむ
とあり水とあるるのをつける之なるや妻帯
さを崎と見くる附合之

お母乃の 鳩乃 藤 ぶの 月
ものいへ本意ふびく 春乃 風

はきこえちのしきき
糖を ねきむる 鳩の 何らせ
幼をねいしなき思を 化糖らむ
附ぞろ人を埋める 鳩の 何れはさふ

幼をねのねくを見くよりなき思ふおの
ねきくうつらげよけりやうらぬ
なるふ中くふかちのまはるなるい
へゆいや

お立しめむ 唇を 懐ふ 生を
月はへ 湊き 陣中 の 市

お白お立ハ一めて 料理をなす 唇を 懐ふ
りけきくくは懐向むぐはなるやまを
たのふふ何らむ 陣中の 妻帯とらん
はたさくらたえ

小徳禱を贈る戒の師

わがぼむの母ふ似るもゆりて

赤子の^{ビユカ}戒に小徳禱まで戒師より

ままあるこかゝるおちどよつぐと

わがぼむの聲の母ふ似るもゆりて人

をつくさる附合あり

あふらの束おつとたる古今集

花に對きほ坊の酒の花

前白いうのもあふらにさき古今集も

あるぞし附ごらんハそのたを集もち

たるハあふらの坊と見く花のほ坊の酒花

をひらく

蚕^コだぬ動きく管中子

海木をつくりて古た意を見む

蚕^コ羽さるふをみちのくと

一のめく海木をつくりて古た世の意乃

はまを見たとし附合あり

眠^{カゲ}くハ豆の降りふいさぬ

百望の総を本曾の牛追

目前の総絆

豆くくぬ杖ハ何とちゆく鬼
吉州所を寺ふたしる ヒツダブキ 松皮草

吉州不致すに取したらむいさハめくもの
まどく思もあくらむ世の白ハ中かハ杖の
外ハ思ハ何とい子てあくらむくの情愁
月見よと引起き心く恥しき

ウスキ 髪何ふゲさるる 藤の 志
前句をよりあたる人をさばりりぞ
たあきものいさびり 起る月をも見ぬ
くといはまりたといはるるが 恥しき

後句をぞと来た人と見くめでたきはま
をつけたるこ

白的場のまき 咲る山吹

春を種し七ツのま乃ちうら石

七ツのま乃ちうらためしふりよる石のを
とあふ取りても忘れを思ひ出さ存あふ
しちうら石白的場の何よりい何よべさけま
なりよるべくかふるさハ衣家よハあ
るくの白的場といふよくつけり
かき消るるなハ聖中の地花よ

つりとささるる山太の七年

前句ハ姓中の地蔵の妻ふまゝなる子
階替あり後句ハ姓宿たゞしたる令
見くくの附合之

鳴子松、ろく片、殺の定

盗人ふつれそふ姓ガカを位て

前句ハよのつぬれ田舎のはまなるを川
橋トく盗人の宿の鳴子ふまゝたるつけ
向ありあゝるならん盗人の妻となりて
身をくやゝゑるるにりれむべし

秋の墨 待の 宿 廻ハ 逢

ものいハ小いふ顔をたしいを

前句宿廻に秋の墨路かきたる風流の
まがたたりまゝりる人乃面新あれどた
しふ逢ともけりかゝきやゝまを後句ふ
てハまでれものいひけりまゝとふまゝ人
りしとまじし小いふ顔柄いれてまらぬ
かふもてあしハむりくはまこ

盗人こハた二十ハ一の里

松の根小茂をたあらべくまらむ

前句何となくいれどとろくの里といふ夜の
何やしたふ監人のをるべきふとこゆ後句ハ
きなはちろのねろろししたふよふ十の歌をど
いふもの、醒宿してことふ大と一の歌とい
ふよて一いふといきやうき見えたり
何の月も意ゆ意ふとろ然いん
き後ともきえぬ狗のいしきに

意のまことをつくさる。附合之意何れが
ころ月を見うくもかたしつれといふ月す
き後とつけてき後ともきえぬといふいとがほ

衣をききて 寝き世の中
酒のめバ谷の朽木も 佛あり

句の朽木てハ衣をもちききて、木のゆもかま
ハぬたをことを殺急の証徒と見く酒に研
たる目よハ谷の朽木も佛のやうにみゆと
いへる附合な水ど意どころハ衣をききて
世の中を睡くさまむむといふハもと及んぬ
をことおまらいつりりねどたることて朽木
佛ありとつけるあくのち暖たるるべ
洞の地と花ふら純るるる

昔の菊の穂の洞や深つらむ

山陰葛原

冬を隣々 流人 某州

ふも又昨日をねむ石のうへ

まゝとふけつけ白涙を流すべしとむと

まればかへつゝ 竟成 換ふふく 然モクニヤ儼ニヤ也

一

芭蕉公附合集評注上巻終

